

郝懿行の『爾雅義疏』に於ける節略本・足本についての考察 —王念孫の『爾雅郝注刊誤』を中心として—

若松信爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘一―一(〒八〇七―八五八六)

(二〇一二年十一月八日受付、二〇一二年十二月十三日受理)

はじめに

清代における考拠字の研究成果は、經学研究上意義深いものであつたことはいうまでもないであろう。その中で『爾雅』に対する研究成果としては、多数存在するが代表的なものは主として邵普涵(一七四三―一七九六)の『爾雅正義』と郝懿行(一七五七―一八二五)の『爾雅義疏』が挙げられる。『爾雅正義』は乾隆五十年(一七八五)に成り、『爾雅義疏』は道光二年(一八二二)の成立である。この二書の優劣に関しては、後世様々な形で論評されているが、本稿ではその優劣についての義論には触れない。しかし、後出である郝懿行の『爾雅義疏』が邵普涵の『爾雅正義』を意識した上で著述されていることは当然であろう。このような場合一般的には後出の著作が、前出の著作の不備を是正し更に完成度の高い内容になるのが通例である。問題であるのは従来より多くの指摘がなされてきたように、『爾雅義疏』に於いてはこ

の例が適切であるとは一概にいえない部分がある。この問題の原因は『爾雅義疏』の版本にあることは周知のことであろう。『爾雅義疏』の版本の出版時期を整理して述べると、道光九年(一八二九)の『皇清經解』所収本(經解本)、道光三十年(一八五〇)の陸建瀛の出版したもの(陸本)。以上を節略本、或は節本という。以上の二書の内容は同一である。次に咸豐六年(一八五六)の楊似増、胡珽等の出版したもの。同治五年(一八六六)に郝懿行の孫の郝聯蓀、聯薇が出版した家刻本がある。咸豐六年本と家刻本は足本といい、足本の内容は節略本より四分の一ほど多い。節略本は王念孫(一七四四―一八一八)が『爾雅義疏』の不適切な部分を刪去したものである。この点については後に羅振玉(一八六六―一九四〇)が王念孫の『爾雅郝注刊誤』を出版し明確にしている。つまり王念孫が刪去した、『爾雅義疏』を經解本、陸本は定本と見なし出版したのである。では何故に經解本、陸本の後に足本が出版されたのであろうか。本稿ではこの問題を『爾雅

郝注刊誤』の内容を検討しつつ、概観してゆく。

一、『爾雅義疏』の成立過程

ここでは郝懿行の『爾雅義疏』が如何なる形で成立したのかということ、書簡等を中心に見てゆくことにする。郝懿行が『爾雅義疏』の執筆を始めたのは嘉慶十三年（一八〇八）のことである。この年に孫星衍（一七五三〜一八一八）に与えた有名な書簡がある。そこには、

爾雅正義の一書は該博と稱するに足るも猶ほ未だ研精に及ばず。其の下巻に至りては、尤も影響多し。懿行樛昧を揆らず、創めて略義を爲る。上は前賢を掩ふを欲せず。又た劉光伯の杜の過ちを規すが如きを欲せず。是れを用ひて自ら一書を成し、相因襲せず。性簡略を喜む、故に之を爾雅略義と名く。⁽¹⁾

とあり、『爾雅正義』に対する不満を述べ、自ら『爾雅略義』という書物を著したことを記している。この『爾雅略義』が後の『爾雅義疏』の基盤となるべきものであろう。これを機に郝懿行は『爾雅正義』とは別に『爾雅』に対する新疏製作の意図を固めたと考えられる。翌嘉慶一四年（一八〇九）には郝懿行の師である阮元（一七六四〜一八四九）は郝懿行宛書簡に於いて、

是を以て爾雅の學に明らかならざれば、則ち五經四書は皆鼠璞なり。今子爾雅の學を爲す。聲音を以て主と爲し其の訓詁に通ず。余亟やかに之を許す。以て其の簡を得るを爲せ。簡を以て繁に通ずれば、古今天下の言は皆部居有りて、喉舌の地を越へず。孔子曰く、「辨言の樂しみは席を下らず」と。余、子と席を接して之を辨ず。其の樂しみ何如。⁽²⁾

と述べ、郝懿行の研究方法である「聲音を以て主と爲し、其の訓詁に通ず」という姿勢を賞し、その著作の完成を望んでいる。このような研究方法は嘉慶期に於ける特徴であるとして、滝野那雄氏は「乾隆期には文字に密着して注釈を行う。しかし、嘉慶期以降は、音通現象すなわち、音声の類似する語は、意義も類似するということを利用して文章を読みかえてゆく方法が盛んになったというようである。邵晋涵の『爾雅正義』は乾隆五十年（一七八五）に成ったから前者に属する。郝懿行の『爾雅義疏』は嘉慶から道光にかけて書かれたから、後者に属し、あまり音訓に重点を置かなかつた『爾雅正義』に対して満足できなかつたと言えないただろうか。」⁽³⁾と述べている。確かにこのような乾嘉期に於ける學術研究法の変化はあり、郝懿行の不満もそこにあつたと考えられる。胡培翬（一七八二〜一八四九）の記した「郝蘭皋先生墓表」に、郝懿行の言として『爾雅義疏』と『爾雅正義』の相違点

を以下のように記録している。

爾雅邵氏の正義は蒐輯較や廣し、然ども聲音訓詁の原は尚ほ壅闕多し、故に發明鮮し。今余、義疏を作り、字借・聲轉の處においては詞繁なるも殺がず。殆んど其の然る所似を明らかにせんと欲す。然ども之を言ふこと既に多く、得る所有れば必ず失ふ所有り。又た曰く、余田居すること多載、草木蟲魚の知らざる者に遇へば、必ず其の名を詢り、其の形を詳察し、之を古書に考へ、以て其の然否を徵す。今茲に疏中、其の舊說に異なる者は、皆目驗を経て、胸臆に憑るものに非るなり。此れ余の書の邵氏に別つ所似なり。⁽⁴⁾

これによると、『爾雅正義』と比較して郝懿行の自負する所のものは古韻学を利用した訓詁にあると考えられる。嘉慶一四年（一八〇九）の郝懿行の阮元宛書簡にその『爾雅』研究の詳細が記されており、そこには、

懿行比來爾雅を修整し、竊に謂へらく詁訓は聲を以て主と爲し、義を以て輔けと爲す。古の作者、積名は聲を以て聲に代へ、聲近くして義同じ、故に積名の一部は爾雅の二部と爲る。廣雅は義を以て義を圃き、義博くして文賅はる。故に廣雅の一部は爾雅の二・三部と爲る。今述ぶる所は蓋し積名の聲を

主として、廣雅の義を推さは、一聲通轉して十餘聲に至らん。是れ爾雅の十餘部を得るなり。一義旁く推して四・五義に至らば、是れ爾雅の四・五部を得るなり。此の證を以て發すれば、類に觸れて通じ、舊人の疏義の但だ古書を鈔撮するのみにして、經に通ずると爲し、死本子を守定し動轉する能はざるに似ざるなり。⁽⁵⁾

とあり、古韻学重視を強調し書簡後半では、

即ち今釈詁の一篇、經營未だ畢らず。其の中の佳處已に復た少なからず、亟かに一通を繕寫して先づ呈し誨正を欲するも、語多くして了らず。容に八・九月都に入るの時を陵ち、邸中にて晉謁すべし。庶幾くは復た請業執經の故事を修されんことを。⁽⁶⁾

と記し、この時点で『爾雅義疏』『釈詁』の執筆に着手していることがわかる。また同時期の書簡と考えられるものに、王引之（一七六八〜一八三四）宛の書簡がある。

某近ごろ爾雅義疏の釋詁一篇を爲し、尚ほ未だ了畢せず。竊に謂へらく詁訓の學は聲音・文字を以て本と爲し、轉注・假借は各々部居有り。疏通證明するは了悟に存す。前人の疏義

は但だ經典を博引するを取りて以て籍の徴と爲し、已に二義を落第するを知らず。鄙意は古音・古義中に就きて其の旨趣を博めんと欲す。其の會歸を要むれば、大低同・近・通・轉の四科の相統系するに外ならず。先づ許叔重の書に従ひて其の本字を得、而る後其の孰が假借爲るかを知り、觸類旁通し、繁碎を避けざれば、仍りて自ら條理分明にして、相雜廁せず。其の中に亦た佳處多く、前人の未だ發せざる所と爲らん。(9)

これを見ると、阮元に宛た書簡と同様の趣旨が記された部分がある。このようにして執筆が開始された『爾雅義疏』であるが、完成に至るまでには多大なる労力と歳月が費された。嘉慶一八年(二八一三)の阮元宛書簡には、

懿行半載以來、時に偏墜の疾を患ひ、爾雅の業、久しく未だ料理せず。筆墨荒蕪、惟だ夫子董めて之を正せ。前に賜りし文言説の數條を讀み、茲に復た釋訓の一編を示さるるを蒙り、將に病除を俟ちて二書の要言を融會し爾雅義疏に登入せんとす。(8)

とあり、また同じ時期と考えられる別の阮元宛書簡でも、

懿行久しく偏疝を患ひ、尚ほ未だ痊に就かず。荏苒歲餘、蟲

魚注を輟む。分陰惜しむ可きも、良に以て慨然たり。(9)

とある。つまり郝懿行は疝病の一種を患ひ、これにより『爾雅義疏』執筆の作業は一時中断していたことがわかる。病は重症であつたらしく、嘉慶二十年(二八一五)に於ける阮元宛書簡にも、

懿行疝を病み、首尾三年、去歲より今に至るまで、漸く能く平復す。本より爾雅を覃思せんと欲す。(10)

とある如く、平癒まで三年費やしたことがわかる。結果として『爾雅義疏』の完成は道光二年(二八二二)のことであつた。しかし、その内容について自負心はあつたというものの、陳奂(一七八六—一八六三)の記した「爾雅義疏跋」にある郝懿行の発言から、古韻学の理解に不安があつたことは多くの先学の指摘する所である。(11)その部分を挙げると、

先生著はす所の爾雅疏の稿を挾みて、徑に館中に来り、以て自ら其の治經の難きを道ふ。漏下四鼓なること四十年、常に老妻と香と焚き對座して、異同得失を參徴し、論合はざれば輒ち反目して止まず。草木蟲魚は、親ら驗するより出づること多し、訓詁は必ず聲音に通ずるも、余則ち聲に疏し、子盍ぞ我が爲めに之を訂さざる。奐時に將に南歸せんとし、敢へ

て諾さず。⁽¹²⁾

とあり、妻である王照円と討論しながら著述を行い、また一方で「余則ち声に疏し」と古韻学に対する理解不足を告白している。そこで陳奐に訂正を依頼するが、陳奐自身はこれを断つたと述べている。この文によると郝懿行の古韻学による訓詁は完璧なものとはいえない難いものであったことは、本人自身自覚している。陳奐に断られたことにより、この問題を如何にして解決しようとしたのであろうか。同じく道光二年頃と考えられる阮元宛書簡に次のように記されている。

半歳以來、意に函を問ふを缺くは、實に爾雅義疏を考訂し勿勿にして違あらざるに縁る。歳莫復た茲脱を蒙り、昇ふに修書の資を以てす。感深く浹纏す。今茲に二月半の後、爲す所の義疏、粗々畢る可きに當りて、尚ほ須らく子細點檢の一番をすべく、便ち鈔胥に付して副本を寫すことを爲す。將に書を携へて贊と爲し粵中の遊と作さんことに擬せんとす。比聞く夏の間夫子使ち常に觀に入るべしと。幸いに親しく師範を藉るを獲ん。快慰如何。⁽¹³⁾

これによると『爾雅義疏』の校訂を、結局阮元に依頼したことがわかる。因に『阮元年譜』によると阮元は道光二年四月二十八日

に広東より入京している。⁽¹⁴⁾ 阮元はその『爾雅義疏』の稿本を自身の師である王念孫に託したと考えられる。これは阮元自身も古韻学を完全に理解していなかったため、古韻学の大家である王念孫に校訂を依頼したのであろう。⁽¹⁵⁾ 『清史列伝』には以下の如く記されている。

懿行の爾雅におけるや、力を用ふること最も久し。稿を凡そ數々易へ、歿するに垂んとして後に成る。訓詁同異、名物疑似、必ず詳らかに辨論を加へ、疏通證明す。故に造る所晉涵に較べ深しと爲す。高郵の王念孫之に點閱を爲し、儀徴の阮元に寄せて刊行す。⁽¹⁶⁾

この王念孫の訂正を経た『爾雅義疏』が節略本、或いは節本といわれ『皇清經解』に收入されるのである。『皇清經解』收入時に嚴杰が更に刪去した部分もあるが、節略本は概ね王念孫が刪去したものである。

二、『爾雅郝注刊誤』の内容

王念孫『爾雅郝注刊誤』は周知の如く『爾雅義疏』の誤りを是正した書物である。この書を公表したのは羅振玉（一八六六～一九四〇）で、民国時代のことである。その経緯は序文に、

己未仲夏に逮び、海東より國に返る。明年貴陽の陳松山黃門の許より義疏の寫本を得たり。首尾朱墨爛然たり。凡そ句の乙する處は朱筆を用ふ。又た凡そ一語の未だ安からざる有れば、一字の譌脱有れば亦た朱筆を以て訂正す。書述を以て之を觀れば皆石渠先生の手に出づ、間に一・二有るは文簡の書爲り。其の尤も未だ安からざる處は、則ち石渠先生墨籤を加へ、條毎に皆念孫案するにの字を出す。凡そ百十有三則、刪定せるは果して石渠先生より出づるを知る。名を託すに非るなり。⁽¹⁷⁾

とある。「名を託すに非るなり」というのは、足本『爾雅義疏』にある宋翔鳳の序文に「刪去の文は高郵王石渠先生の手に出づ、と。或いは云う、他人の刪るところにして、名を王に嫁す、と。」とあるのに対して述べたものである。羅振玉は王念孫の『爾雅義疏』に対する誤謬刪去の姿勢を、

其の刊する所は正に清切ならざるは無し、嚴師の弟子に於けるが如く、此に於いて古人の友朋論學の忠実の欺かざるを見るべし。石渠先生は實に蘭皋先生より長すること十餘年、然れども今人に在りては即ち齒相殆きが若きも、亦た未だ必ずしも是の如きの真切にして唯阿ならざるはあらざるなり。考

ふるに蘭皋先生は道光五年に卒し、阮氏の經解の刻は道光六年に在り。九年に至りて工竣る。石渠先生は道光十年二月に卒す。阮氏刻書の時は郝氏初めて亡きも石渠先生は健在なり。故に當時は定本を以て付刊す。其の後、人乃ち誤りて未定本を以て足本と爲し、復た之に刊布を爲す。于庭先生序を作り郝氏後人の意に徇ひて、或は假託の言に出づると云ひ、以て之に阿ることを爲す。道・豐の諸儒已に漸く先輩の質實の風を失へり。⁽¹⁸⁾

と述べ、その厳しい批正の態度を賞している。そして王念孫の刪定を経た經解本を定本とし、足本を未定稿本と位置づけるという妥当な判断をしている。これは生前の郝懿行も古韻学の認識不足から陳奐・阮元に『爾雅義疏』の稿本の校閱を強く乞うていたことから理解できる。王念孫が阮元から『爾雅義疏』の校閱を依頼された理由は、前述した如く阮元自身の古韻学の理解が完璧でなかつたこともあるが、阮元作の「王石臞先生墓銘」に、

先生初め東原戴氏に従ひて、聲音・文字・訓詁を受く。遂に爾雅・說文に通じ、皆選述有り。繼いで餘姚の邵學士晉涵、爾雅疏を爲し、金壇の段進士玉裁、說文の注を爲す。先生遂に再び之を爲さず。其の經學を綜べて、廣雅に納入し、廣雅疏證二十三卷を撰す。⁽¹⁹⁾

と記すように、王念孫が『爾雅』の学に通じていたからに外ならない。『爾雅郝注刊誤』の内容について蕭璋は「王石臞刪訂爾雅義疏聲韻謬誤述補」に於て「韻部の誤」・「声紐の、附聲転の誤」・「妄評経籍旧音」の三つに分類して分析している。また経解本には王念孫が刪去した部分以外にも、訂すべき部分があると述べている。⁽²⁰⁾ 孫玄常も『爾雅郝注刊誤』に於ける王念孫の訂正部分百十三條の内容について、そのうちの四八條が音韻上の誤りであると指摘する。⁽²¹⁾ 以上の点から考えると郝懿行の古韻学の知識は本人の自覚以上に不足していたとも考えられる。その上『爾雅』に対する認識にも王念孫とは差異がある。『爾雅郝注刊誤』冒頭部の「釈詁」第一を見ると、(文頭の「郝云」は原文には無いが、懿行の意見と王孫念の意見を明瞭にするため、蕭璋の論文を参考に便宜上設けた。)

郝云ふ、爾雅の作は文字を辨別し、形聲を解釈するを主とす。故に諸篇俱に釋と曰ふ。念孫案するに、爾雅の作は釋義を主とし、文字を辨別するを以て形聲を解釋するに非るなり。⁽²²⁾

とあり、その相違が見られる。以下、蕭璋の論文に基づき、韻部の誤り、声紐の誤り、妄評経籍旧音の順に『爾雅郝注刊誤』の内容を見てゆくが、紙幅の関係上その一部を例として挙げるに止め

る。韻部の誤りの一例を挙げると、

郝云ふ、臺は古は讀みて緹の如し。念孫案するに……緹は古音に於ては支部に屬す。臺は古音に於ては之部に屬す。又た臺は古は讀みて緹の如しと言ふを得ず。⁽²³⁾

郝云ふ、蕎麥の蕎は應に莝に作るべきに似たり。念孫案するに、蕎麥の蕎は、喬聲に従ふ、古音は宵部に在り。莝の字の若きは則ち収聲に従ふ、古音は幽部に在り。詩に「爾を視るに莝ふが如し」と。椒と韻を爲す。古音は皆幽部に在り。蕎麥の蕎を謂ひて當に莝に作るべしとは、何を據とするかを知らず。⁽²⁴⁾

郝云ふ、來孫とは釈名に云ふ、「此れ無服の外に在り、其の意疏遠にして、之を呼びて乃ち來るなり」と。案するに此れ來の字を説くも望文生義に似たり。來の言は離なり。離も亦た遠きなり。下文に出の子を謂ひて、離孫と爲す。離・來は音義同じのみ。念孫案するに、來は古音に於ては之部に屬す。離は古音に於ては歌部に屬す。來の言は離と言ふを得ず。動もすれば輒ち漢人の望文生義と謂ひて、改むる所又た當らず、其れ已むに如かざるなり。⁽²⁵⁾

等があり、多数の韻部の誤認が指摘される。郝懿行のこのような恣意的な韻部誤認に対し、王念孫は「其れ已むに如かざるなり」といい、酷評している。

次に声紐の誤りについて挙げる。

郝云ふ、方言に云ふ、「蠶は燕・趙の間、之を蠶蟪と謂ふ」と。按ずるに、蠶蟪の合聲は蜂と爲す。念孫案するに、蜂は蠶蟪の合聲に非ず。⁽²⁶⁾

郝云ふ、拒とは、撞の假音なり。説文に拒は給なり、約なりと訓ず。別に撞有り、拭なりと訓じ、董聲に从ふ。經典は俱に拒に作り、音震、振と同じ。念孫案するに、説文に撞の字は訓じて飾と爲すと雖も（俗に拭に作る）、其の字は自ら董聲に从ひ、音は居焮の切、拒の臣聲に从ひて音震なる者と同じからず。經典に拒に作るは、乃ち振の假音、撞の字の假音に非るなり。⁽²⁷⁾

次に声転の誤りを見てみる。

郝云ふ、蹶曳とは今の登萊の人の短尾なると謂ふ。蹶洩の音は蹶雪の若し。棗の形は肥短、故に以て名と爲す。釋文に「蹶は居衛の反、洩は息列の反」と。初學記に廣志を引きて云ふ

「桂棗・夕棗の名有り」と。然らば則ち桂・蹶は聲同じ、夕・洩は聲の轉、疑ふらくは桂夕は即ち蹶洩ならん。念孫案するに、蹶洩は二字を以て名と爲す。桂と夕とは一字を以て名と爲す。單に一字を以て轉聲と爲すと得ず。⁽²⁸⁾

郝云ふ、楔は古黠の反、今の語聲轉じて家櫻桃と爲り、以て山櫻桃と別つは則ち謬りなり。

念孫案するに、楔・家は一聲の轉と雖も然れども俗語の家櫻桃と言ふは、以て山櫻桃と別つのみ。楔の字轉じて家と爲るに非ざるなり。⁽²⁹⁾

とある。次に蕭璋が「妄評經籍旧音」とした部分の例を挙げる

郝云ふ、古は蒐を讀みて鬼に从ひて聲を得、陸氏の釋文に蒐は色留の反とするは非なり。

念孫案するに、鬼に從ひて聲を得る者は、亦た音色留の反を得。鬼は九と聲近し、鬼侯は通じて九侯に作る是れなり。且つ茹蘆・茅蒐は皆疊韻にして、蒐狩の蒐は古又た通じて搜に作る。說苑脩文篇に云ふ「蒐とは之を搜索する」と。是れなり。蒐の字は讀みて搜の若し、石(色)留の反を以て非と爲すを得ず。⁽³⁰⁾

等が見られる。以上蕭璋の分類に基づいて、王念孫の指摘する部分の一斑を取り挙げてみた。他には、

郝云ふ、誦とは、説文に詢に作る。或は誦に作り、又た説に作る。訟なりと云ふは、釋言の文の「此の鞠れる誦を降せり」に本く、(毛)傳も亦た釋言に本く、蓋し詢は匈聲に従ふ。言語争ひ訟ふ、其の聲匈匈たり。故に又た盈と訓ず。所謂發言廷に盈る者なり。

念孫案するに、校勘記は誦を以て衍字と爲す。是なり。當に之に従ふべし。⁽³¹⁾

郝云ふ、遷は通じて還に作る。曲禮に云ふ「跪きて屨を遷す」と。鄭注に遷は或は還と爲す。今案するに遷は讀みて旋の若し、般旋と遷徒とは義近し。

念孫案するに、遷の還と爲るは乃ち形の譌にして、聲の通に非ず。淮南子天文篇に是れ小遷と謂ふ。今本遷は譌りて還に作る。⁽³²⁾

等が挙げられる。これを見ると音韻のみならず、衍字や文字の誤りにも言及する部分がある。また、邵晋涵の説の引用に関しては、

郝云ふ、邵氏の正義に枚乗の七發を引きて、糶麥と云ふ。案ずるに糶の音は促、鄭内則に注して「生糶は糶と曰ふ」と。説文は糶に作りて云ふ「早に穀を取る」と。糶は糶と音義同じ、糶麥は爵麥に非るを知るべし。

念孫案するに、内側の飯は黍・稷・稻・粱・白黍・黄粱の糶・糶あり。鄭注に「生糶は糶と曰ふ」と。説文に「糶は早に穀を取るなり」と。皆糶麥の謂ひに非ず。糶麥は之を穀と謂ふを得ざるなり。是の書、邵説を用ふ者、十の五六、皆其の名を載せず。邵説を駁せる者は、獨り其の名を載するは、不可に殆し、況んや駁する所又た確ならざるをや。⁽³³⁾

とあり、王念孫は郝懿行の『爾雅義疏』の内容について、半ば近く邵晋涵の『爾雅正義』の説を剽窃しながらもその名を挙げず、邵晋涵に反駁する場合のみにその名を挙げるが、その郝懿行の駁説も正確とはいえないとして、その公平さを欠く態度を厳しく批判している。『爾雅郝注刊誤』の内容は前述の「已むに如かざるなり」という文言等、郝懿行に対する辛辣な批判が一つの特徴といえる。更にその内容を検討してゆくと、郝懿行の古韻学の韻部に対する認識不足や、功名心にはやる学問的態度が明確になってくるのである。郝懿行は阮元の弟子であるが、師弟関係からいえば阮元の師が王念孫であり、郝懿行は王念孫の孫弟子ということ

になる。では郝懿行と王念孫との関係は如何なるものであったのであろうか。両者が相見える機会は当然あったと考えられる。しかし、郝懿行の文集には王念孫の息子である王引之に宛てた書簡はあるが、王念孫に宛てた書簡は一札もない。また、王念孫にしても『高郵王氏遺書』等に、郝懿行に対する書簡はない。もし郝懿行が『爾雅義疏』の校閲を依頼するのであれば、陳奐ではなくその専門家である王念孫に依頼するのが妥当であろう。また阮元を通じて王念孫に依頼したとも考えられるが、郝懿行の阮元宛書簡には王念孫に言及した部分は管見の限りでは見当たらない。

ところが、第三者の資料から両者の交流を示す資料が若干伝えられている。郭象弁の「顔氏家訓附記序」に、

先生高郵の王伯申尚書と同年爲り、曾て伯申の尊人懷祖給事に従ひて故を問ふ。其の作爾雅義疏は、自ら之を高郵に本づく⁽³⁴⁾と謂ふ。

とあり、郝懿行の『爾雅義疏』が王念孫の学説に基づいていると述べる。また、許維通の『郝蘭皋夫婦年譜』の嘉慶十三年戊辰の項で『爾雅義疏』について、

矧んや郝氏は一篇撰成する毎に、必ず王石渠・阮雲臺・孫淵如・王伯申・馬元伯の諸儒と往來して商榷せるをや。焉んぞ

敢へて掠美して竊に自ら辱を取らんや。⁽³⁵⁾

と記している。しかし、これらの記述は信憑性に欠ける。先ず郭象弁の記述について考えると、郝懿行の学説が王念孫の説に基づくのであれば、何故『爾雅義疏』の内容が多く王念孫の学説と乖離しているのであろうか。次に許維通の年譜に於ける記述は郝懿行書簡には、王念孫以外の諸儒宛の書簡は存在するが、王念孫宛の書簡、もしくは王念孫からの書簡が一通も存在しないこと、一篇成るごとにこれを王念孫に確認しているのであれば『爾雅郝注刊誤』のような書物は存在していないであろう。つまり以上の二説は成立し難いといわねばならない。道光五年（一八二五）に郝懿行は卒す。経解本の成立は道光九年（一八二九）である。王念孫は『爾雅義疏』の刪去作業を、道光二年から道光九年の間に行つたと考えられる。恐らく生前の郝懿行が刪去の全貌を窺い知ることができなかつたであろう。

三、何故足本は出版されたのか

『爾雅義疏』の足本は前述の如く成豊六年（一八五六）刻本と同治五年（一八六六）の家刻本の二書である。成豊六年刻についてであるが、宋翔鳳の序文によると、

嘉興の高君又た足本を得、以て阮・陸兩本と校するに、多きこと四の一なり。或は刪去の文は高郵の王石渠先生の手より出づと云ひ、或は他人の刪る所と爲ると云ひて、名を王に嫁す。と。夫れ一經の文を説くに、必ず衆家の議を合し、此より前んずる者未だ必ずしも是ならず。此より後るる者未だ必ずしも非ならず。惟だ學者に在りては、其の本根を求め、門戸を立てず、同に康莊に歸するのみ。是を以て河帥の楊公、高君の本を得て流播を爲す。時に劖劖僅か半にして、河帥即世す。茲に胡君心耘始めて之を續成して、後に郝氏一家の言、遂に完書有り。⁽³⁶⁾

とある。この序文は宋翔鳳が『爾雅義疏』の内容を刪去した人物を王念孫ではないのかと疑問を呈した有名な序文である。(この問題は『爾雅郝注刊誤』の出現により解決する) この序文の後半を見ると足本の伝来が理解できる。更に胡珽の序文には、

歲乙卯(成豐五年)嘉興の高伯平均儒文學、嚴鶴山(厚民の子)の鈔する所の郝疏足本を得、河帥の楊至堂以増先生に奉りて、讀みて之を善してするを以て、郵書して資を寄せ、校刻を爲すことを命ず。功過半に方り、至堂先生遽に道山に歸す。珽因りて資を益して以て事を蔵へる。⁽³⁷⁾

とあり、これにより詳細な足本の入手経路が判明する。つまり高均儒が『皇清經解』の編集者であつた嚴杰の子である嚴鶴山より足本の写本を入手し、蔵書家で知られる楊以増がそれを出版しようとした。しかし、楊以増が死亡したため、その事業を胡珽が引き継ぎ出版にこぎつけたということである。この嚴鶴山から得た足本は出版されて成豐六年刻本といわれている。これが足本出版の最初である。その後、郝聯蓀・聯薇が同治五年再び家刻本として足本を出版する。家刻本にある聯蓀・聯薇の序文によると、

先大父蘭皋公の爾雅義疏は、儀徴の阮文達皇清經解に刊入す。沔陽の陸制府も又た金陵に單刻す。聯蓀等山陝に僻處し、俱に未だ之を見ざるなり。或は兩刻本は皆高郵の王念孫觀察の節する所の本にして、未だ全書爲らずと謂ふ。河帥の楊至堂先生の足本を錢唐の嚴厚民杰明經の嗣君鶴山の許より得るに追ひ、始めて仁和の胡君心耘珽に屬し同志を鳩合して、呉門に校刊す。乃ち未だ幾ならずして、又た粵賊の毀つ所と爲る。先大父生平の著述十余種なるも、心力尤も此の書に萃む。先大母終るに臨みて、猶ほ諄諄と亟かに原本を覓むるを以て誠と爲すがごとし。聯蓀等謹しみて之を志し、敢へて忘るること勿し。歲乙丑(同治四年)二月、聯蓀濟南に事ふること有り。陽洲の汪叔明司馬に晤ひ、欣然として蔵する所の楊氏の足本を以て相授けられ、且つ板讎の役に任ぜらる。聯薇既に

涿州に刺たり。謹みて廉俸を節して入る所は剗削の資と爲し、
月九を閲して工始めて竣へる。⁽³⁸⁾

とある。これによると聯蓀・聯薇は未見ではあるが、経解本・陸本が足本ではないことを知っている。足本である成豊六年刻本が出版されたが、大平天国の乱で版木その他が失われてしまう。聯蓀・聯薇は郝懿行の妻である王照円の遺言として足本を入手することを常に心がけていた。そして同治四年に汪叔明から成豊六年刻本を授かり、出版した旨が記されている。つまり家刻本も成豊六年刻本と同じく巖鶴山本の系統である。巖鶴山本に王念孫の批校本では、恐らく無かつたであろう。もしそれが存在したならば楊以増達も一代の碩学王念孫が否とした部分を全文挙げて出版することはないからである。ただ王照円は王念孫の刪去を知りながらも、足本の出版に固執した。その理由は何故であろうか。前述したように郝懿行が『爾雅義疏』を著述する様子を陳奐が「(王照円と) 対座して異同得失を参徴す」と記している。いうまでもなく王照円は当時女性でありながら高名な学者であった。『清史列伝』によると、

照圓聰慧人に過ぐ、懿行の持論と合はざる毎に、辨を諍ふこと竟日。著に詩説一卷・列女補注八卷。附女録一卷有り。又た懿行と詩を以て答問す。懿行之を録して、詩問七卷を爲す。

其の爾雅義疏も亦た間ま照圓の説を取る。⁽³⁹⁾

とあり、『爾雅義疏』の成立に王照円が深く関わっていることが記録されている。これらのことから考えられるのは、つまり『爾雅義疏』は夫婦の合作といえるのではないだろうか。それ故に王照円は王念孫の刪去を不当に刪去されたものと考え、定本の出版を切望していたと考えられる。そして孫の聯蓀・聯薇がその宿願を果たしたのではないだろうか。

おわりに

以上郝懿行の『爾雅義疏』についてその成立過程と節略本・足本の出版を、王念孫の『爾雅郝注刊誤』の内容を中心として概観してきた。郝懿行自身が古韻学の理解に不安があるため批正を求めていたことは多くの先学の指適する所である。その経緯は阮元を経由し、王念孫の手によって行われた。前述のようにそれが皇清経解本・陸本として出版されることになる。本来これは節略本ではなく羅振玉のいう定本であったと考えるべきであろう。しかし、後に巖鶴山から入手した未定稿本が、楊以増・胡珽等により出版され、それが足本であると認識される。更に同治五年にその

足本が家刻本として再出版される。そこには郝懿行の妻である王照円の共著者としての自負心の影響が強く働いていたと考えられる。後に羅振玉が『爾雅郝注刊誤』を公表し、『爾雅義疏』の部分的刪去の理由を明らかにすることにより、郝懿行の古韻学の理解のありかたと誤りが露呈することになった。その意味に於いて足本と称する未定稿本は郝懿行の学力を知る上で極めて重要な資料といえる。結局『爾雅義疏』に於ける節略本・足本の問題は経解本等の『爾雅義疏』の定本が出版された後に、なぜか未定稿本が出版され、足本として流布してしまつたという極めて稀有な事態にその原因があつたと考えられる。

注

- 1 郝懿行著 安作璋主編 『郝懿行集』卷七 齊魯書社 五二二七～五二二八頁 二〇一〇年 爾雅正義一書、足稱該博、猶未及乎研精、至其下卷、尤多影響。懿行不揆樸味、創爲略義、不欲上掩前賢、又不欲如劉光伯之規杜過、用是自成一書、不相因襲。性喜簡略、故名之爾雅略義。
- 2 阮元 『聖經室集』上卷 世界書局民国七一年 一〇八頁 是以不明爾雅之學、則五經四書、皆鼠璞矣。今子爲爾雅之學、以聲音爲主、而通其訓詁、余亟許之。以爲得其簡矣。以簡通繁、古今天下之言、皆有部居而不越乎喉舌之地。孔子曰辨言
- 3 滝野邦夫 「郝懿行撰爾雅義疏の訓詁とその成立」『密教文化』第一五四号五三頁 一九八五年
- 4 『郝懿行集』卷七 六〇九二頁 爾雅邵氏正義蒐輯較廣、然聲音訓詁之原、尚多壅闕、故鮮發明。今余作義疏、于字借聲轉處、詞繁不殺、殆欲明其所以然。然言之既多、有所得必有所失矣。又曰、余田居多載、遇草木蟲魚有弗知者、必詢其名、詳察其形、考之古書、以徵其然否。今茲疏中、其異于舊說者、皆經目驗、非憑胸臆、此余書所以別乎邵氏。
- 5 前掲書 卷七 五二三五頁 郝懿比來修整爾雅、竊謂詁訓以聲爲主、以義爲輔。古之作者釋名以聲代聲、聲近而義同、故釋名一部、僞爾雅二部也。廣雅以義闡義、義博而文賅、故廣雅一部、爲爾雅二、三部也。今之所述、蓋主釋名之聲、而推廣雅之義、一聲通轉至十餘聲、是得爾雅十餘部也。一義旁推至四・五義、是得爾雅四・五部也。以此證發、觸類而通、不似舊人疏義但鈔撮古書、以爲通經、守定死本子、不能動轉。
- 6 前掲書 卷七 五二三五頁 即今譯詁一篇、經營未畢、其中佳處、已復不少、亟欲繕寫一通、先呈誨正、而語多不了、容俟八・九月入都時邸中晉謁、庶幾復修請業執經之故事

- 7 前揚書 卷七 五三三八頁
某近爲爾雅義疏、釋詁一篇、尚未了畢。竊謂詁訓之學、以聲音、文字爲本、轉注・假借、各有部居。疏通證明、在乎了悟。前人義疏、但取博引經典以爲稽徵、不知已落第二義。鄙意欲就古音古義中博其旨趣、要其會歸、大抵不外同・近・通・轉四科、以相統系。先從許叔重書得其本字、而後知其孰爲假借、觸類旁通、不避繁碎、仍自條理文明、不相雜廁、其中亦多佳處、爲前人所未發。
- 8 前揚書 卷七 五四二二頁
懿行半載以來、時患偏墜之疾、爾雅之業久未料理 筆墨荒蕪、惟夫子董而正之。前賜文言說數條、茲復蒙示釋訓一篇、將俟病除、融會二書要言、登入爾雅義疏。
- 9 前揚書 卷七 五四二九頁
懿行久患偏疽、尚未就痊、荏苒歲餘、蟲魚輟注、分陰可借、良以既然。
- 10 前揚書 卷七 五四三〇頁
懿行病疽、首尾三年、去歲至今、漸能平復。本欲覃思爾雅。蕭璋「王石臚刪訂爾雅義疏聲韻謬誤述補」浙江學報 第二期 卷 第一期 十七、十八頁 一九四八年 瀧野邦夫前揚論文 五二頁 孫玄常「王念孫爾雅郝注(疏)刊誤札記」語言文字研究專輯(下) 上海古籍出版社 三七二頁 一九八六年 『郝懿行集』 卷七 六一三九頁
- 11 前揚書 卷七 五四三八頁
先生挾所著爾雅疏稿 徑來館中、以自道其治經之難、漏下四鼓者四十年、常與老妻焚香對座、參微異同得失、論不合輒反目不止。草木蟲魚、多出親驗、訓詁必通聲音、余則疏于聲、子蓋爲我訂之。俟時將南歸、不敢諾。
- 12 前揚書 卷七 五四三八頁
半載以來、竟缺問函、實緣考訂爾雅義疏、勿勿未遑。歲莫復蒙慈睨、畀以修書之資、感深挾纊。今茲二月半後、所爲義疏當可粗畢、尚須子細點檢一番、便付鈔胥爲寫副本。將擬携書爲贊作粵中之遊、比聞夏間夫子便當入覲、幸獲籍親師範、快慰何如。
- 13 前揚書 卷七 五四三八頁
王章濤『阮元年譜』 黃山書社 二〇〇三年 七二二頁 道光二年之項に「四月二十八日、至京師、召見五次」とある。
- 14 蕭璋「王石臚刪訂爾雅義疏聲韻謬誤述補」 四二頁に「阮氏亦是不明古韻之學者」とある。
- 15 『郝懿行集』 卷七 六〇九四頁、六〇九五頁
懿行之于爾雅、用力最久、稿凡數易、垂歿而後成。訓故同異、名物疑似、必詳加辨論、疏通證明、故所造較晉涵爲深。高郵王念孫爲之點閱、寄儀徵阮元刊。
- 16 王念孫『爾雅郝注刊誤』『叢書集成統編』所收 芸文印書館 序 一頁 一九七一年
己未仲夏、由海東返國、明年從貴陽陳松山黃門許、得義疏寫本。首尾朱墨爛然、凡句乙處、用朱筆。又凡一語有未安、一
- 17 前揚書 卷七 五四三八頁
先生挾所著爾雅疏稿 徑來館中、以自道其治經之難、漏下四鼓者四十年、常與老妻焚香對座、參微異同得失、論不合輒反目不止。草木蟲魚、多出親驗、訓詁必通聲音、余則疏于聲、子蓋爲我訂之。俟時將南歸、不敢諾。
- 18 前揚書 卷七 五四三八頁
半載以來、竟缺問函、實緣考訂爾雅義疏、勿勿未遑。歲莫復蒙慈睨、畀以修書之資、感深挾纊。今茲二月半後、所爲義疏當可粗畢、尚須子細點檢一番、便付鈔胥爲寫副本。將擬携書爲贊作粵中之遊、比聞夏間夫子便當入覲、幸獲籍親師範、快慰何如。
- 19 王章濤『阮元年譜』 黃山書社 二〇〇三年 七二二頁 道光二年之項に「四月二十八日、至京師、召見五次」とある。
- 20 蕭璋「王石臚刪訂爾雅義疏聲韻謬誤述補」 四二頁に「阮氏亦是不明古韻之學者」とある。
- 21 『郝懿行集』 卷七 六〇九四頁、六〇九五頁
懿行之于爾雅、用力最久、稿凡數易、垂歿而後成。訓故同異、名物疑似、必詳加辨論、疏通證明、故所造較晉涵爲深。高郵王念孫爲之點閱、寄儀徵阮元刊。
- 22 王念孫『爾雅郝注刊誤』『叢書集成統編』所收 芸文印書館 序 一頁 一九七一年
己未仲夏、由海東返國、明年從貴陽陳松山黃門許、得義疏寫本。首尾朱墨爛然、凡句乙處、用朱筆。又凡一語有未安、一

- 字有譌脫、亦以朱筆訂正、以書迹觀之、皆出石渠先生手、間有一・二、為文簡書。其尤未安處、則石渠先生加墨籤、每條皆出念孫案字、凡百十有三則、知刪定果出石渠先生、非託名也。
- 18 前揭書 序 一〇二頁 其所刊正莫不精切、如嚴師之於弟子、於此可見古人友朋論學之忠實不欺。雖石渠先生實長于簡舉先生十餘年、然在今人即齒相若殆、亦未必如是之真切不唯阿也。考簡舉先生卒於道光五年、阮氏經解之刻、在道光六年、至九年而工竣。石渠先生卒於道光十二年、阮氏刻書時、郝氏初亡而石渠先生健在。故當時以定本付刊。于庭先生作序、徇郝氏後人之意、而為或云、出於假託之言、以阿之、知道豐諸儒、已漸失先輩實實之風矣。
- 19 阮元 『寧經室集』 卷中 九三頁
先生初從東原載氏受聲音・文字・訓詁、遂通爾雅・說文、皆有撰述矣。繼而餘姚邵學士晉涵為爾雅疏。金壇段進士玉裁、為說文注。先生遂不再為之、綜其經學、納入廣雅、撰廣雅疏證二十二卷。
- 20 蕭璋 前揭論文 一八頁に「至於學海堂本亦尚有聲音可商之處」とある。
- 21 孫玄常 前揭論文 三七二頁
- 22 王念孫 前揭書 一頁
爾雅之作主於辨別文字、解釋形聲、故諸篇俱曰釋焉。念孫案、爾雅之作主於釋義、非以辨別文字、解釋形聲。
- 23 王念孫 前揭書 二二頁
臺古讀如緹。念孫案・・・緹於古音屬支部、臺於古音屬之部、又不得言臺古讀如緹。
- 24 王念孫 前揭書 二〇一頁
蕎麥之蕎、似應作莠。念孫案・・・蕎麥之蕎、從蕎聲、古音在宵部。若莠字、則從収聲、古音在幽部。詩視爾如莠、與椒為韻、古音皆在幽部也。謂蕎麥之蕎、當作莠、不知何據。
- 25 前揭書 一二一頁
來孫者、釋名云、此在無服之外、其意疏遠、呼之乃來也。案此說來字似望文生義。來之言、離也。離亦遠也。下文謂出之子為離孫。離來謂音義同耳。念孫案、來於古音屬之部、離於古音屬歌部、不得言來之言離。動輒謂漢人望文生義而所改、又不當、不如其已也。
- 26 前揭書 二九一頁
方言云、讎、燕、趙之間、謂之蠓螭。按、蠓螭之合聲為蜂。念孫案、蜂非蠓螭之合聲。
- 27 前揭書 六頁
拒者、撞之假音也。說文拒訓給也、約也。別有撞、訓拭也、从董聲。經典俱作拒、音震與振同。念孫案、說文撞字與訓爲飾、而其字自从董聲、音居焮切。與拒从巨聲而音振者不同。經典作拒者、乃振之假音、非撞字之假音也。
- 28 前揭書 二六頁

- 32 前掲書 六頁
遷通作遷。曲禮云、跪而遷屨。鄭注遷或爲還。今案、還讀若旋、般旋與遷從義近。念孫案、遷之爲還、乃形之譌、非聲之通。淮南天文篇、是謂小遷。今本遷譌作還。
- 31 前掲書 五頁
誦者、說文作詢、或作誦、又作說。云訟也。本釋言文降此誦、傳亦本釋言。蓋詢從匈聲、言語爭訟、其聲匈匈。故又訓盈、所請發言盈延者也。念孫案、校勘記、以誦爲衍字是也。當從之。
- 30 前掲書 二十頁
古讀菟从鬼得聲、陸氏釋文、菟色留反非矣。念孫案、從鬼得聲者、亦得音色留反。鬼與九聲相近。鬼侯通作九侯、是也。且茹蘆茅菟、皆豐韻而菟狩之菟、古又通作搜、說苑脩文篇亦云、菟者、搜策之是。菟字古讀考搜不得以石留友爲非。
- 29 前掲書 二六頁
楔、古黠反、今語聲轉爲家櫻桃、以別於山櫻桃、則謬矣。念孫案、楔・家雖一聲之轉、然俗語言家櫻桃者、以別於山櫻桃耳。非楔字轉爲家也。
- 33 前掲書 二〇頁
邵氏正義、引枚乘七發云穉麥。案、穉音捉、鄭注內則生穫曰穉。說文作糲云早取穀也。糲與穉音義同。可知穉麥非爵麥矣。念孫案、內則之飯・黍・稷・稻・粱・白黍・黃粱・稻・糲。鄭注生穫曰、說文糲早取穀也。皆非穉麥之謂、穉麥不得謂之穀也。是書用邵說者、十之五六、皆不載其名而駁邵說者、獨載其名、殆於不可、況所駁又不確乎。
- 37 前掲書 卷四 二六五八頁
歲乙卯嘉興高伯平均儒文學得嚴鶴山厚民之子所鈔郝疏足本、而後郝氏一家之言、遂有完書。
- 36 前掲書 卷四 二六五六頁、二六五七頁
嘉興高君又得足本、以校阮・陸兩本、多四之一、或云刪去之文出高郵王石渠先生手、或云他人所刪、而嫁名於王。夫說一經之文、必合衆家之議、前此者未必是、後者未必非、推在學者求其本根、不立門戶、同歸原莊。是以河帥楊公得高君之本而爲流播、於時刻剛僅半、而河帥即世。茲胡君心耘始續成之、
- 35 前掲書 卷七 六一二六頁
矧郝氏每撰成一篇、必與王石渠・阮雲臺・孫淵如・王伯中・馬元伯諸儒往來商榷。
- 34 『郝懿行集』 卷六 五一八九頁
先生與高郵王伯申尚書爲同年、曾從伯申尊人懷祖給事問故。其作爾雅義疏、自謂本之高郵。

38

以奉河帥楊至堂以增先生、讀而善之、郵書寄資、命爲校刻。功方過半、至堂先生遽歸道山、珽因益資葺事焉。

前掲書 卷四 三七九五頁

先父蘭皋公爾雅義疏、儀徵阮文達刊入皇清經解、沔陽陸制府又單刻於金陵、聯蓀等僻處山陬、俱未之見。或謂兩刻本皆據高郵王念孫觀察所節本、未爲全書。迨河帥楊至堂先生得足本於錢唐嚴厚民杰明經嗣君鶴山許、始屬仁和胡君心耘珽鳩合同志、校刊於吳門。乃未幾、又爲粵賊所毀。先大父生平著述十餘種心力尤萃於此書。先大母臨終猶諄諄以亟覓原本爲誡。聯蓀等謹志之勿敢忘。歲乙丑二月、聯蓀有事濟南、晤陽湖汪叔明司馬、欣然以所藏楊氏足本相援、且任校讎之役。聯蓀既刺涿州、謹節廉俸所入爲剞劂之資、閱月九而工始竣。

39

前掲書 卷七 六〇九五頁

照圓聰慧過人、每與懿行持論不合、諍辨竟日。著者詩說一卷、列女伝補注八卷、附女録一卷、女校一卷。又與懿行以詩答問、懿行録之爲詩問七卷。其爾雅義疏亦間取照圓說。

A Study of Haoyixing's Eyayishu Focusing on Digest and Complete Book

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi,
807-8586, Japan

No English abstract